

偏見とは差別とは

大津 隆文

EU本部所在地・ブリッセルで人気のあつた絵葉書の文句。「アイルランド人のようにいつもシラフで、イギリス人のように料理が上手で、フランス人のようにいつも謙虚で、イタリア人のように秩序正しく、ドイツ人のようにユーモアを解し、オランダ人のように気前よく、スペイン人のように地味で、……」

これはジョークなのか偏見なのか。「偏見」はある集団に対する非好意的な見方とされる。必ずしも具体的な体験に基づくものではなく、自己の属する集団共通の画一的な見方で、相手集団の全員がそうであると決めつける。

例えば、オランダ人を知らないのに彼等は皆ケチと信じ込み個人を見ない。個人レベルの「誤解」は事実には接すれば氷解するが、集団的な偏見の是正は容易ではない。

偏見は心理的な現象であるが、これが具体的な行動に移ると「差別」になる。差別行為には色々の段階がある。個人的には、近所付き合いをしない、結婚を許さない、商取引で家を貸さない、ホテルに泊めないなど。集団的には、移民を受け入れない、投票権を与えない等々。極端な例が、ナチによるユダヤ人の大量殺戮、米国、カナダにおける日系人強制移住、関東大震災時の朝鮮人殺害等。

偏見をなくすためにはどうしたらよいか。まずは教育で、現在ある偏見が間違っていることを具体的に教えることが大切である。同時に社会の仕組みを変えていくことが重要だ。障害者等差別の対象になっている各種マイノリティ、女性を平等に扱うという公的な枠組みを作っていくことである。差別が間違いとされ禁止されれば、人の心も変わり差別行為もなくなっていくことは経験上明らかだ。

最近LGBT法案で差別禁止の取扱いが注目されている。差別禁止といっても差別行為を罰するという法案ではない。性的少数者への「差別は許されない」ことへの理解増進を図ろうという法案である。内心までは踏み込まないが行為の善悪は明らかになる。偏見や差別解消の第一歩になることを期待したい。